



避難所の運営を考える

講演会、避難所見学の2回のワークショップ及び避難所運営ゲーム(HUG)を踏まえて、避難所の運営を考えました。

ワークショップでは以下の「3つの問い合わせ」に沿って、各自で付せんに意見を書き出し、模造紙に貼りながら、気づきやアイデア、懸念事項などを整理、共有しました。



問1 避難所を開設した直後に、最低限は決めておいたほうがよい部屋(機能)や場所(スペース)は?

- 一人で階段の昇降や長距離の移動が難しい方には、居住空間やトイレが使いやすい場所にあるとよい。
- 更衣は男女別に部屋を用意した方がよい。
- 授乳室を設けたいが、スペースの都合で難しければ女性用更衣室と一緒に設置するのも有効だと思う。
- 運営本部、救護所、ペットスペース、掲示板などは初期の段階で設けた方がよい。
- 運営本部は、受付対応、避難者の誘導、情報を掲示板に書き出すなど、重要で活動量も多いため、運営本部要員が大勢必要になると思う。

問2 様々な障害がある人たちを受け入れる際に、配慮したらよい点は?

- 障害の種類や程度は人によって異なり、必要な支援が異なるため、障害者というだけで部屋やスペースと一緒にすることはできないのではないか。
- 避難所では利用できる空間が限られているため、障害の種類で対応を細分化しない方がよいと思う。
- 障害者のニーズに対し、部屋を分けるなど施設の利用方法で対応できることもある。配慮してもらいたい点を伝えてもらうなどのコミュニケーションで対応できる点もある。
- ヘルプマークのようになものをつけていると、声を掛けやすい。



ヘルプマーク
外見からは分からなくても配慮を必要としている方が、周囲の方に援助を得やすくするためのマークです。

問3 日本語を得意としない外国人を受け入れる際に、配慮したらよい点は?

- 災害時だけでなく、日頃からお互いの文化や習慣などを知ろうとする気持ちや取り組みが大切である。
- 国や地域ごとに既にあるコミュニティや繋がりを尊重し、そのキーパーソンを通じて、お互いに伝えたいことを伝え合えたらよいのではないか。
- 繋がりづくりは“食”をキーワードにすると、比較的取り組みやすいかもしれない。
- 多言語化に頼りすぎず「わかりやすい日本語」を心がける。
- スマートフォン等が使える状況なら、翻訳アプリを活用すると、誰でもコミュニケーションが取りやすそう。

令和4年度「新宿区女性をはじめ配慮を要する方の視点でのワークショップ」レポート



新宿区では、女性、子ども、高齢者、障害者、外国人などの多様な視点を反映した避難所運営について考える取り組みを進めています。

令和4年度は、大久保地区及び戸塚地区で避難所見学を行い、災害時の避難所の使い方や運営について学び考えました。このリーフレットは、その時の“気づき”をまとめたものです。

新宿区

みんなで考えよう多様な視点で取り組む “避難所運営”

なぜ多様な視点で避難所運営を考えるのか？

過去の災害では、女性のほか、高齢者や障害者、外国人といった要配慮者に特有の課題が数多く報告されています。例えば、聴覚障害、発達障害などの外見ではわからづらい障害を持つ方にサポートが行き届くまでには時間がかかる、在留外国人や外国人観光客は言葉が通じにくいためルールを共有できない、などの課題がありました。これらの課題に向き合うためには、要配慮者やその支援者が体験した災害時の困りごとを学び、当事者側の視点から見た避難所を知ることが大切だと考えています。

本ワークショップでは、過去の災害で要配慮者を支援した方の体験談や避難所見学を通じて事前の心構えをし、災害時の要配慮者支援のイメージを持ちやすくすることで、避難者同士の相互扶助体制を構築することを目的としています。

過去に学ぶ

東日本大震災での障害者支援、熊本地震での外国人支援に携わった方に、体験談や工夫した点・苦慮した点についてお話を聞き、災害時のイメージを共有しました。



【障害者支援】
阿部利江 氏

東北福祉大学総合福祉学部
社会福祉学科講師



【外国人支援】
八木浩光氏 氏

(一財)熊本市国際交流振興事業団
常務理事

東日本大震災では避難所や仮設住宅での支援活動に取り組み、被災地域に暮らす人々の生活・復興の過程を追い続けてきました。障害のある方々やその家族から被災体験を伺い、災害から命を守り、生活をし続けるための福祉実践を問うなかで、「福祉」と「防災」の密接な関係を学んできた。

今回学べたこと

お二人の話に共通することは、地域にどのような要配慮者が住んでいるのか、どのような文化を持っているのかを知るための、平時の「繋がり」の大切さでした。また、繋がりをつくるためのヒントとして、日頃の活動や地域のお祭り、イベントなどで、要配慮者ができうことをお願いしてみる、役割を担ってもらう、力を信じてみる、という、支援する側も「受援力」を持つことが大切であると教えていただきました。



避難所を知る

女性、子ども、高齢者だけでなく、障害者、外国人の視点からも避難所を見学し、当事者や自分たちが避難生活や避難所運営をする時に、どのような状況になるのかを考えました。

！ 参加者の気づき ?

大久保地区/新宿中学校



武道場

戸塚地区/戸塚第二小学校



体育館



トイレ



災害用マンホールトイレ



和室



屋外運動場



備蓄倉庫



備蓄倉庫

コラム

避難所運営ゲーム（HUG）で避難所の運営を擬似体験

避難所運営ゲーム（HUG）は、カード1枚1枚を避難者にみたて、カードに書いてある様々な事情を持った避難者を、避難所でどのように受け入れていくかを疑似体験できるカードゲームです。

本プログラムでは、基本のHUGカードに、障害者・外国人の視点や受付対応、男女共同参画のカードを追加しました。講演会や避難所見学で得た気づきも踏まえ、更衣室や障害のある方が使う部屋、避難者からのボランティア募集、イラストや色を使い分けた掲示板づくりなどが実践されました。

協力:HUGのわ

